目覺めよ　は、果して健全なる基礎の下に築かれてゐるかどうか？　と。

凡そ世界平和といふことは、國際正義の觀念を基礎とせなければその實現は覺束ない。國際正義といふのは、一切の世界の國民をして、地球上の天然資源を共に樂しみ共に用いしめ、又世界の市場を開放して、自他共に共存共榮の途を講ずることだ。かゝる正義を無視して世界の平和を求めてみたところで、それは要するに沙上の樓閣に過ぎない。然るに世界の現狀は如何、日・獨・伊のように惠れない國は、餓死か滅亡かを選ぶの外はないのに、飽和の英米兩國などは、滿腹の腹をたゝきながら、それでも尙一切を讓るまいとするではないか。されば飽和國にして覺醒せない限り、第二第三の滿洲事變は、世界の到るところに起るものと覺悟せねばなるまい。

和戰の鍵を握る英國

前にも說いた通り、滿洲は日本の生命線ではあるが、その經濟的價値は今後の二十年乃至三十年間に限られ、日本の爲に永久の原料品供給地であり、又市場たることは出來ない。他の一方に於ては、日本は海洋に依つて國民經濟を培養せねばならぬ立場にもある。ゆへに永き眼を以て太平洋の平和を求めんとするならば、滿洲以外にも日本人の捌き口を求め、又我が通商の自由と市場とを開拓せねばならぬ。こゝに於てが前說した國際正義が殊に

必要となつてくるのである。然るにこの點に就ては、就中英國は我が要求を充たすに最も適當な立場にある。見よ、印度・濠洲・新西蘭は、何れも稀薄の人口、無限の原料と市場を擁し、英國の覇制下にある蘭領東印度諸島の如きも、これと略ぼ似よつた狀態にあるではないか。英人は須らく虛心坦懷に這般の事情を認めねばならぬ。これに反してもしこれをも否認するのみか、進んでは更に日本に挑戰し、又は他國を煽動して、日本の合理な發展と公平なる通商を抑止せんとするならば、日英戰爭は遂に免るゝを得ない。

かゝる戰爭の勝敗に就ては既に前に述べておいた。然らば日英相戰ふことによつて、兩國は何ものを得るか？　我々は一步を進めてこの點も考へてみねばならぬ。

三　目覺めよ！英國民

凡そ戰はんとするものは、稍もすれば勝敗の念のみに驅られて、戰ふことによつて何ものを得るか、如何なる影響を受くるかを忘れたがる傾がある。史上無益の戰爭を敢てしたものは多くはこの結果である。

日英戰爭を望む米國人士

日英戰爭は、之はアメリカ、フランス、イクリー、ロシヤ及支那等からみれば、望ましきことであり、彼等は寧ろ兩國が相戰はんことを熱望してゐる。それもその筈だ、世界の大國たる日英兩國が、戰ふことに依て疲憊の極又起つ能はざるに至るならば、彼等は勞せずして自己の立場を强固にすることが出來るから。

ロシヤが日英相戰ふことを如何に熱望するかは既に之を述べた。アメリカにしても世界に於ける最大の競爭者日英が倒れることは、己れ自ら世界の王座に君臨する最も犧牲少き僥倖ではないか。英國が倒れるか又は戰傷の結果當分起つことが出來なければ、歐洲は主として佛・獨・伊の天下となるであらう。これも亦彼等の熱望するところである。若しそれ支那が之を熱望することはこゝに繰返すまでもない。約言すれば日英戰爭は、これ等諸國にとつては願つたり叶つたりで世界の强國籍から日英兩國を除き、且これを取除くことに依て彼等の國際的地位を向上せしむる一擧兩得の手段である。

だが日英兩國は、相戰ふことに依て抑も何ものを得るか？

英國が勝つた場合

私は前著『日本對世界戰爭』に於て、日米戰爭にアメリカが勝つたと假定してにも大部は適用し得るのである。

假りに英國が勝つたと假定してみよう。かゝる場合には、英國は日本をして滿洲に於ける政策と權益とを放棄せしめ、旅大の還付は勿論、滿鐵を日本の手から英米の手に移し、又滿洲國及支那にある日本駐屯軍の撤退、並に支那全土に亘り、日本が軍事行動をなすことを禁じ、かくして支那に於ける英國の利權や英米の門戸開放主義を積極的に擁護することは出來るであらう。或は又朝鮮に獨立を許し、樺太南半を英米に割讓せしむることも考へ得る。然しながらその結果はどうなるか？

毎年八十萬內外づゝ增加しつゝある日本の人口に對しては、强制的に產兒制限を行はしむるか又は何れにか植民地と缺如する物資を與ふるでなければ、第二の日英戰爭延ては世界大戰の再起は免れない。强制的產兒制限の如きものは事實云ふべくして容易に行はるゝものでない。滿洲朝鮮樺太より日本人を驅逐したならば、人口の捌け口と物資の缺如に苦しむ日本人は、遠からざる中に、生きんが爲に劍をとつて起つことは極めて明白である。果して然らば、日本をして英國に

對し、第三第四の戰爭を起さしめない爲にも、又は滿洲や朝鮮等を第二のアルサス、ローレン化し、之を將來戰爭の禍根となさない爲にも、日本に對して滿洲國に對する政策と從來の權益を保持せしめ、かくして英國の對支利權擁護や門戸開放主義を文字通りに實現せしめ、進んでは滿洲の一部を日本の爲に解放する方が賢明の策ではないか。かゝる程度のものならば何も戰爭に訴へる必要はない。然るにも拘らずこれを戰爭に訴へたならば、それは算盤に合はぬ極めて高價なるものとなるのみならず、却て漁夫の利を第三者に奪はるゝことゝもなるであらふ。

かゝる見易き道理に眼を掩ひつゝ、英國にして戰ひを敢てするならば、第三第四の日英戰爭延ては世界大戰に備へんが爲め、日本の復讐戰を未然に豫防する策を講ぜねばなるまい。英國にして日本の復讐戰に備へんとならば、澎湖列島、臺灣をも含む南西諸島、小笠原島は素より、日本の委任統治下にある赤道以北の南洋群島をば、英米又は英の領土となすか、又はその委任統治下におき、又日本を牽制するに必要なる島嶼を難攻不落とする決定的努力をなさねばならぬ。次には主として石油の供給地樺太南半を英の手に割取し、又支那の後見役をも自分等の手に引受けねばなるまい。然しながら南洋群島の委任統治を引受くることに依て英國は何ものを利するか。こ

れ等群島の貧弱なる經濟的價値は天下周知の事實である。日本に屬する諸島嶼は人口餘りにも多過ぎる。してみれば英國の利用し得るところは軍事上以外にはない。若し澎湖列島や臺灣及南西諸島並に小笠原島を難攻不落とするならば、これ直ちにアメリカのヒリツピン並にグワムを脅威することゝなつて、却て英米衝突の禍因を作る本となるであらう。又樺太の南半を奪取し、支那の後見役を引受くることは、英露衝突の新たな機會を作るは勿論、支那が亂れる時はいつも英國が跡始末をつけねばならぬことゝなつて、英支衝突の機會を作るのみならず、又英米衝突の新たな原因をもつくることゝならふ。約言すれば太平洋の平和はこれが爲に益々危險となり、寧ろ將來の紛糾を增大する結果となるのである。

パリの平和會議に於て、聯合國が獨逸に課した不合理な壓迫と拘束は、上述した英國の措置が如何なる結果を齎らすかを示す生きた實例ではないか。聯合國の不當な壓迫と拘束の爲に歐洲は益々不安となり、戰爭を無くさんが爲の戰爭は却て戰爭製造の皮肉なる運命と化しつゝある。凡そ勃興の氣運を有する新進氣鋭の國民に對して、その活動を封ずるが如きは、これ却て戰爭の原因となるものである。英國にして戰勝の勢ひに乘じて日本の手足を縛り、その膨脹發展を妨げる

ならば、獨逸に對する聯合國の遠算を再びすることとなるより外にはない。

英國は又日本から賠償金を期待するを得まい。日本より賠償金を强取する如きは、これ明らかに獨逸に對する聯合國の遠算を再びすることにならふ。獨逸の賠償問題で痛く苦んで來た英國がかゝる過誤を再びするとは我等は信ぜない。

英國と米國とは　だが英國の受くる被害は只だにそれだけでない。前にも說ひたように、英米間には重大なる利害の衝突があり、兩雄並び立たざる史上の敎訓を確實に繰返しつゝある。この深刻なる衝突を表面化せざるものは、我が日本が英米間の楔となつて存在するからで、若しも日英戰ふことにより、假りに日本の海軍が全滅するとなれば、英米間のキヤスチング・ヴオードはこゝに無くなり、兩國は勢ひ正面に對立して、猛烈なる爭覇戰を演ずることゝならざるを得ない。

次に支那はどうかといふに、英國が戰ひに勝つた結果、支那の鼻息は益々荒くなり、やがては排外の餘先を英國に廻はして、英國は五卅事件以來の幻滅の悲哀を再びすることにならふ。日本は幸ひ支那の近距離にあるから、いざとなれば兵力を以て支那の不法を懲罰することも出來るが

英國はそれが出來ない。その結果が何を意味するかは智者をまたずして明らかである。

日本が勝つた場合　次に日本が勝つた場合はどうか？　一言にしていへば英帝國は瓦崩するより外にはない。

先づ印度はどうなるかを考へてみよう。日英戰ふとなれば、英國はいつもの慣用手段を用ひ、印度に獨立を許すといふ巧みなトリツクの下に、印度人を引つけんとするであらふ。然しながら今日の印度人はかゝる欺計にのるには餘りに經驗が大である。彼等は英國の提示する贈りものには眼もくれずに、英國が日本と戰ひつゝある好機を利用して、その熱望する獨立を得んとするであらふ。されば英國にして戰ひに負けるならば、印度は完全に英國の手中より脫することは確實以上の確實であり、かくして英國はその生命たる寶庫を失ふことになる。

次に英國は國運の消長に大なる關係をもつ支那の市場をも失ふことにならふ。況んや香港が日本に制壓されることゝもなれば、こゝに英國の對支貿易の基礎は動搖し始め、結局支那の市場を放棄するの已むを得ない立場に突落さるゝものと覺悟せねばなるまい。

英國は或はアメリカが來つて援助、新西蘭に對する日本の遠征軍を防げ、その安全を保證して

くれるであらふと、一縷の望みを抱くかも知れない。然しながらカナダは兎も角として、濠洲、新西蘭の爲めに、アメリカが日本との戰爭を賭してまで一肌脱ぐかは疑問である。否寧ろアメリカが濠洲、新西蘭を保護してくれるならば、それは英國の爲めにするのでなく、これを自分のものにしようといふ魂膽の下でなければ肯んぜまい。

こゝに至て英帝國は完全に瓦崩し去るのである。誰かこれを空言と斷言し得るか。英人たるもの胸に手を當てゝ靜かに這般の事情を考へてみねばならぬ。

嗚呼英　英帝國は今下り坂にある、否寧ろ興亡の岐路に立つといふを適當としよう。日

國！　英戰爭は英國を自滅に導く以外の何ものでもない。果して然らば英國は無用なる

體面論を捨て、日本に讓るより外に良策はない。あり餘る領土をもつ英國としては、これが賢明

の策であり、己を全ふする所以の道でもある。

現狀維持は世界大戰に疲れた交戰國民には天の福音であつたが、十數年後の今日では、これは結局一の空念佛となつてしまつた。見よ!! 青年國と老大國、現狀打破と現狀維持とは互に相對立して、今にも第二の世界大戰をまき起さんとしつゝあるではないか。國際關係は化石でない。

否寧ろ絶へず變化しつゝある。そして平和はこの有機的變化の上にのみ樹立するを得るのである。かゝる變化に眼を掩ひ、若しも老大國が青年國に讓るを欲せず、徒らに口實を設けて無理にも現狀を維持し、平和の美名に隠れて、國際關係を依然として不合理のまゝに固定するならば、紛爭は已む時なく、遂には戰爭となつて破裂するより外にはない。

太平洋の平和　日・英・米は太平洋の三大雄邦である。太平洋の平和は主としてこの三大國の和衷協同にかゝつてゐる。然るに今日のように太平洋が稍もすれば次の世界戰爭の舞臺とならんとするのは、三大國の力の均衡がとれず、英米二國が日本を犠牲としてその權力を恣にせんとするからだ。されば眞に太平洋の平和を保たんとならば、先づ英米兩國が讓り、この均衡を保つことが先決條件である。

アメリカは東太平洋に、日本は西太平洋に、英國は南太平洋に、各々局部的優越を保ち、互に他を侵すことが出來ないようにして、この三國は當該方面に於ける諸國の指導者後見役となり、これ等諸國民の意志を尊重しつゝ、これを向上發展せしむることに眞摯の力を盡すと共に、人種的排他的觀念を一掃し、移民及關稅の障壁を撤廢し、又仲裁々判制度を發達せしむることに依て

紛爭解決の途を講ずるならば、軍縮も容易となり、相互國民間の信頼も增進し、太平洋はその名の如く眞に太平洋たらしむることが出來るであらふ。これが爲には英米の讓歩、就中日本と最も衝突し易い立場にある英國が先づ讓るでなければ總ては水泡となる。

英國は太平洋の平和の鍵を握つてゐる。太平洋をしてその名の如く眞に太平洋たらしむるか、又は次の世界戰爭の舞舞たらしむるかは、何よりも先づ英國民の態度如何によるのである。

目覺めよ！　英國民、現狀維持は既に時代後れとなつてゐるのである。（終）

「大英國民に與ふ」
〔定價〕一圓五十錢

昭和十一年四月五日印刷
昭和十一年四月十四日發行

著作者　石丸藤太
發行者　東京市日本橋區長谷川町二ノ五　神田龍一
印刷者　東京市牛込區矢來町廿六　本間十三郎
印刷所　東京市牛込區矢來町廿六　清揚社

發行所　東京市日本橋區長谷川町二ノ五　春秋社　振替（東京）二四八六一
發賣所　東京市日本橋區長谷川町二ノ五　株式會社松柏館　振替東京三九七一六　電話日本橋二六二四

第二回直木賞獲得

吉野朝太平記

鷲尾雨工著

春秋社版

第一巻 楠正行と正儀　四六判 定価一・七〇 郵・一四 四六〇

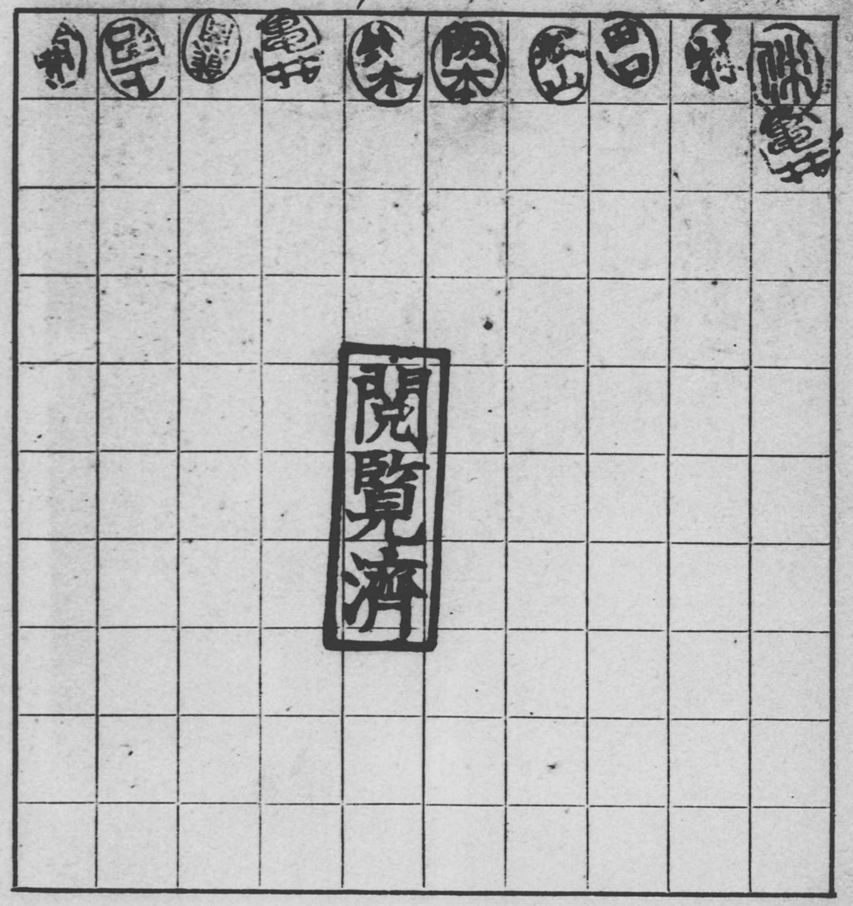
第二巻 正儀策謀の一——師直の死　四六判 定価一・八〇 郵・一四 五一〇

第三巻 直義の死——正儀の京都回復　四六判 定価一・八〇 郵・一四 五三〇

菊池、三上両氏推奨の文壇の新星!!
雨工の名この待望の第三巻に定まる!!

作者雨工の透徹の史眼・卓々の藝術味表現力が壯麗な小説構想をなして南北朝の時代と人を描いた。雄渾な小説だ。曾て無い歴史小説だ。第一巻は楠正行、正儀の性格的対立から四條畷合戦まで、第二巻は正儀の策謀によつて師直が滅びる迄第三巻は其の後をうけて波瀾萬壘、怪奇を極め、神算鬼謀の正儀の謀によつて鳥雄直義は尊氏に毒殺される。南朝は京都を回復し、正儀が病める親房卿と共に古の最城門の址に立つ。若き英雄正儀と、病める偉人親房卿との、惨憺たる赤誠、漸く報いられて南風はじめて薫ふ時、讀む者は凡て齊しく感嘆の涙を呑まずにはゐられないであらう。

第四巻 北朝三上皇の南遷　近刊——以下續刊

11年 6月 9日

117